

博士学位請求論文「生・自由詩・内在律：19世紀末から20世紀初頭の日仏文芸思潮に
関する比較文学的考察——アンドレ・ジッドと相馬御風を中心に」概要

成谷 麻理子

20世紀のフランスを代表する作家アンドレ・ジッド（1869-1951）と、明治期日本で自然主義文学評論家として活躍した相馬御風（1883-1950）とは、直接間接の関係を持たず、互いの影響関係も認めることはできない。ジッドが初めて日本で紹介されるのは明治42（1909）年、広瀬哲士による記事「最近仏蘭西小説の傾向」¹においてであり、その後は、大正2年に三富朽葉が、象徴主義以後のフランス文学を紹介した「フランス文壇の現在」²の中で、ジッドの紹介に数行をさいている。その翌年の大正3年には上田敏が雑誌『太陽』でエドモン・ゴスのジッドを紹介した本を挙げ、紹介の紹介という形でジッドの名に触れている。その翌年の大正4年6月には竹友藻風が雑誌『ARS』に「窄き門」の部分訳を掲載し、大正8年5月には井汲清治が雑誌『新潮』に「ロマン・ロランとアンドレ・ジッド——文学の生命的側面と芸術的側面——」という評論を掲載している。

「小説家たらんとするもの辞典と首引にて差支なければ一日も早くアンドレエジッドの小説よむやうにしたまへかし」という永井荷風の有名な一文は、『新小説』に掲載された「小説作法」³という文章においてであり、永井荷風とジッドの関係は、佐藤春夫が荷風の『暹東綺譚』にジッドの『贖金使い』の影響を見たり、あるいは荷風自身が、ジッド「パリュード」の中心紋の構造に関心を抱いていたことを述べているように、紹介者としてだけではなく小説の技法の実践者として、永井荷風が開いた日本文学の近代への道は大きいものであった。そして大正12年6月、山内義雄が現代仏蘭西文芸叢書の第1巻として新潮社から出した『窄き門』が日本におけるジッド作品の初めての完訳であり、広い読者層から絶大な支持を得ることになる。ジッドといえば「狭き門」という程の認識を生み出し、日本におけるジッドを考える上で外すことの出来ない仕事となる。

昭和に入るとジッドの作品は多数訳され、一般の人々にも広く関心を持たれるようになった。ジッドの倫理的態度と文章に対する美意識の融合は、日本における批評文芸の発生を促し、その自我意識と主客観の問題、政治への態度と行為の問題、そして共産主義思想への傾きという問題は、当時の多くの日本人が自らの問題として受け入れ、盛んに発言を交わした。ジッドの「ソヴィエト旅行記」を訳し、また1935（昭10）年に開かれた「文化擁護国際作家大会」の報告書を日本に紹介した小松清や、読売新聞社の海外特派員として長年パリで過ごし、戦争時のジッドの行動に迫った「ゲイド会見記」を著した松尾邦之助

¹ 広瀬哲士「最近仏蘭西小説の傾向」、『帝国文学』明治42年3月、35頁

² 三富朽葉「フランス文壇の現在」、『早稲田文学』大正2年1月、付録、37頁

³ 永井荷風「小説作法」、『新小説』大正9年4月、63頁

は、日本における「作家と行動」の問題を呼び起こす一つの大きな役割を担った。また、小説の作法の問題として、「無償の行為」を自らの作品の中で描こうとした石川淳、『贗金使い』に倣って日本に「ロマン」を生み出そうとした堀辰雄、そしてジッドの言説をヒントに「純粋小説」を探求した横光利一など、昭和の日本文学にとって、ジッドの存在は余りにも大きい。

相馬御風が評論家として活躍した時代は、日本でジッドが流行するずっと以前である。御風がジッドを読んだ形跡はなく、知識として知っていた可能性はあっても、筆上に上ることは決してなかった。御風がジッドの存在を知っていた可能性は極めて薄く、影響を受けた痕跡についてはその著作物を見る限り皆無であると言ってよい。ジッドが御風の存在を知っていた可能性もまた同様である。

本論文を通して前提となるのは、19世紀末のヨーロッパの思想が日本に取り入れられた事実である。勿論、アンドレ・ジッドを始めとするヨーロッパの人々は、自分たちの言説がアジアの小さな島国で取り上げられ、培養されている事実は知らない。しかし、19世紀末の日本は、ヨーロッパの思想・文学を学ぶことに貪欲であった。そしてさらに、その思想の輸入は、直接間接の関係を持たないある二者に、類似した現象を引き起こす。

本論文の第一部第一章では、フランスにおける象徴主義以後の思想と文学を検討する。アンドレ・ジッドはマラルメの美学から、その文学的キャリアを出発し、1891年には象徴主義的色彩の濃い「ナルシス論」を発表する。しかし時代は、ヘーゲルの二元論の表現から脱し、無意識や、主客や正反では捉えられない第三の相といった概念を含む、新たなパラダイムへと変換しようとしていた。ジッドもまた、1890年代の他の作家と同じように、多様な語りの方を求めて彷徨することになる。「ナルシス論」から「パリュード」を経て、「地の糧」に至るジッドと、1890年代の思想、及び小説について検討する。そして、19世紀末のヨーロッパの思想を学んで、日本の明治40年代に隆盛を誇っていたのが、島村抱月を筆頭とする日本自然主義文学運動であった。彼らの主張する文学理論とは、自然主義の名を冠しながらその実態は、主体と客体の別から全一を唱えるものであり、世紀末ヨーロッパのハルトマンや、ヒュームらの概念を多く継承している。そして同時期の日本において「象徴主義」を標榜する流派もまた存在し、彼らはフランスの象徴主義に学んで、その論を展開していた。日本において、フランス象徴主義から学んだ系譜と、19世紀末のヨーロッパ思想から学んで、日本で理論を組み立てた系譜の類似性を指摘し、第一部第三章では、日仏に共通して見える観照の美学と、そこから脱しようとする予兆について、論ずる。

第二部では「自由詩」と題し、第一章では、フランスで象徴主義の流れの中で起こった自由詩運動について検討する。ギュスターヴ・カーンやヴィエレグリフアの理論を検討し、それを踏まえた上で、ジッドの周りの自由詩の動き——アンリ・ゲオンやヴィエレグリフアとの関わり——を検討し、ジッドの「地の糧」が持つ自由詩的性格について指摘する。同第二章では、同じく日本で起きた口語自由詩運動について述べる。これもまた第一部で論じた日本自然主義文学運動から連動した動きであり、その中心的な役割を担っ

た早稲田詩社の人々——相馬御風、三木露風、野口雨情ら——は、自然主義の思想を推進する抱月の勧めのもとで、この運動を展開することになった。象徴主義、あるいは象徴主義的論理から自由詩へという流れは、日仏に共通するものであると言える。言語表現への関心と、この時代の人々に共通する自由の問題とは何であったのか、自由詩を通じて、外的に求められたものと、内的に求められたものとの区別をしながら、検討する。

第三部「生」では、反象徴主義の動きとして現れる、サン＝ジョルジュ・ド・ブエリエやモーリス・ル・ブロンを中心とするナチュリズムと、それに対するジッドの考え方と態度について検討する。ジッドは1897年に『地の糧』を上梓しており、この作品をもってジッドは、ジャムと共にナチュリズムを担う人物として有望視されるが、その「自然」の考え方から、やがて袂を分かつことになる。そして第二部では、日本自然主義文学運動の観照の美学から派生する「芸術と実行」の問題について、内田魯庵や大杉栄との論駁を中心に見て、御風の模索した「実行」とは何であったのか、検討する。「観念の世界から行為の世界へ」が要点になるこの章であるが、ジッドのアフリカ体験の特筆すべき第一点は、同性愛経験を通して得た「性的官能の場」としてのアフリカであったという点であり、しかしそれは性の解放であると同時に、幼少の頃より抱えていた複雑な性の問題に向き合い、挑戦した場でもあった。謹厳なプロテスタントの教えに背く己と、その己の感覚を肯定する強さを、彼は性の問題を通じて獲得したと言える。本論中ではアフリカ旅行中に書かれ、後に『地の糧』第4書に収められた官能の歌「柘榴のロンド」*La Ronde de la Grenade* を特に試みとして扱う。そして特筆すべき第二点目は、肺の大病を患い、長期逗留を余儀なくされた点である。彼の病気が快方へ向かうなかで、彼の精神にも変化が訪れ、長年の自己凝視の世界から彼は解放されたのであった。彼の回顧録でもある『一粒の麦もし死なずば』*Si le grain ne meurt* の中には次のようにある、「そうこうしている間に、春がオアシスに近づいていた。この土地と同じように、僕もまた蘇る様な気持ちが出た。そればかりでなく、僕は生まれて初めて、自分が生きていると感じられさえた。死の影に満ちた谷間から這い出して、真の生活に自分が生まれ出たような気持ちだった」。その二重の「解放」の結晶とも言える作品が、1897年5月発表の『地の糧』である。

第四部「内在律」では、自己観照の世界で味わった絶望—精神的死と、その闇から見た「生」の世界との間で知った「生と死の恍惚境」を、彼らが表現者としてどのように捉えたのかを論じる。ジッド『地の糧』には、ランセウス、バラーム、サウルというように、炯眼と猜疑心の持ち主が数人登場する。しかし彼らはこの『地の糧』においてその鋭い目から解き放たれ、また死に至ったサウルもその上に花が咲くように、幸福へと導かれている。ここで起きているのは眼差しの変化である。闇から光を見たとき、瀕死の状態から生命を眺めたとき、彼らは時空を超えた人間の「生」の総体を知った。それを文学として表現するとき、ジッドは一方で是と言ひ、もう一方で否というような矛盾に満ちた「循環論法」を編み出したり、小説家が書く自分を書くような「劇中劇」を用いたりした。それは固定しない人間の「生」全体を描こうとするとき、自ずと生じる方法ではなかったかと考

えられる。御風もまた観照の追究によって主客の分離、内観の過剰によってその精神に破綻を来していた。しかし、「生」の全体性を知ることによって、自然主義文学の闇を抜け、新しい大正の明るい文学への架け橋となったことは事実であると考えてよい。彼の力強い新しい「生」の文学を求める声は、大正 2 年ごろの新聞、雑誌に多く見受けられる。御風は、大正 5 年に『還元録』という書を残して文壇を去り、故郷の糸魚川に隠遁することになるが、『還元録』に見られるような、御風におけるキリスト教と仏教の同居、宗教的感情と文学との接近性は、この時代の文学・思想の特徴でもある。明治 30 - 40 年代の時代思潮の様々な特徴を反映し、そして大正の次世代の明るい文学への橋渡しをしながら、文壇を去った相馬御風という人の、文学表現に対する考えと、「生」と内在律は何だったのか、検討を試みた。

アンドレ・ジッドは 14 年相馬御風より早くこの世に生まれ、一年後に没している。しかし、このような彼らの類似した世界性—死と生、恍惚境とその表現—は約 20 年の差を以て生じている。(ジッドは 1893 年 10 月にアフリカに発ち、1897 年 5 月に『地の糧』を刊行、一方御風の闇から光への変化とその発言は、大正に入ってから——即ち、大正 2 (1912) 年頃からである。) 御風の師、島村抱月が 19 世紀末のヨーロッパを直に体験し、知識や情報を持ち帰ったという事実があり、日本自然主義論の基盤にヨーロッパの思想のあることは既に指摘されている。だが、日本の自然主義論が象徴主義的であることを考慮しても、この 20 年の差は何を意味しているのだろうか。明治日本が外国から思想文化を摂取しようとし、その後を追っていたことは事実である。しかしジッドは御風を知らず、御風もまたジッドを知らない。ジッドが初めて日本で紹介されるのは大正 13 年の山内義雄『狭き門』であり、『地の糧』の翻訳は、昭和 4 年 12 月『詩と詩論』第 2 巻 6 冊に掲載された青柳瑞穂の抄訳「地の糧 (抄)」を、昭和 6 年 6 月『詩・現実』に山崎栄治が「地の食物」というタイトルでやはり抄訳を、そして昭和 8 年 5 月には青柳が、今度は「地上の糧より」というタイトルで第一書房『仏蘭西新作家集』に抄訳を掲載した後に、昭和 12 (1937) 年、堀口大學による『地上の糧』が日本最初の完訳となる。だが、中村眞一郎が『文学界』昭和 26 年 4 月号に掲載した「ジイドと日本」と題する文章で、「日本でそれほど多数の読者を獲得したジイドは、おそらく、なかんづく、『狭き門』や『田園交響楽』の作者としてであつた、といふことである。(……)「ジイド的」といふやうな言葉から、直ちに連想される、『地の糧』といふやうな作品は、日本では、ほとんど愛好者を持たなかつたらしい」⁴と述べている通り、日本における『地の糧』は、他のジッド作品に比べて重要視されることもなく、認知されることも少なかったというのが事実である。紅野敏郎は「仏・独文学者と昭和十年前後——「ヴァリエテ」・「仏蘭西文芸」・「カスタニエン」「文学精神」——」⁵において昭

⁴ 中村眞一郎「ジイドと日本」、『文学界』昭和 26 年 4 月、140 頁

⁵ 紅野敏郎「仏・独文学者と昭和十年前後——「ヴァリエテ」・「仏蘭西文芸」・「カスタニエン」「文学精神」——」、『文学』昭和 55 年 7 月、19 頁 (『昭和文学の水脈』、講談社、昭和 58 年 1 月、312 頁)

和文学における外国文学者の仕事に着目し、昭和8年5月に刊行され、小林秀雄、堀辰雄、中原中也、河上徹太郎、平岡昇、辻野久憲などが筆を連ねた雑誌『ヴァリエテ』や、昭和8年3月に早稲田大学仏文科が中心となって刊行された『仏蘭西文芸』などに言及している。この昭和8年から9年頃は、紅野も言う通り、間違いなくフランス文学研究の戦前の黄金期であり⁶、アンドレ・ジッドがその中心あったことは、『ヴァリエテ』第2号がジッド特集を組んだことや、昭和9年に建設社と金星堂の二つの出版社から二種類的全集が同時に刊行されたこと、この時期に次々に翻訳が出版されたことなどからも、その様子は伺えるものである。

ジッドと御風の類似した世界性は、大きな思潮の一部であるとしても、それにのみ結論付けてしまうことは誤りであろう。というのは、初期のジッドは、確かに文学人としての己を熱望してはいたが、それ以前に「自己」の問題を超えるべく一青年として在ったのであるし、また御風の方も、文学評論といえども自己の問題としての言論が目立っている。彼の評論は常に「我」から発する問題であり、それは終生変わることのない、御風の思索の原点であった。すべては己への眼差しから発し、主観と客観を分ける観照の思想、「実行」への問いかけと「実行」の喚起、そして見た闇から光への「生」の喜び。それは表現者として「生」の全体性の表現を要した。生死を超え、時空を超えた人間の「生」の全的表現として、ジッドは『地の糧』を編み、御風は声高な評論を発した。彼らが見た世界、それは文学思潮にのみ還元されるものではなく、個人としてのジッド、御風の、思索の一個の結論として扱うべきであろう。

19世紀末に、様々な起点から起こった多角的な視点の獲得は、主客の分離から苦悶に陥った魂を、超えさせもした。自己観照による煩悶は2人を精神的な闇の中へ落とし込んだが、ジッドはアフリカへ旅立ち、そこで圧倒的な自然と生命の力を感じ、御風は「実行」の思索によって、直観的な生を見た。この「死から生を得る恍惚」は、両者ともが得た法悦境である。既存の形を崩そうとする動きは、人間の思考や感情、出来事を表現する文学や詩にも現れた。自由詩の議論は、一つには形の問題と、もう一つにはリズムの問題があった。日本において、口語自由詩が起こった時点では、「内在律」という概念は、詩のリズムというよりは、個々人のもつ律動という意味において用いられていた。象徴主義の文学は、多角的な視点による——あるいは視点を持たない——表現を目指したが、多いに概念的であり、言語遊戯的であった。これに反抗するアドルフ・レッテや、ナチュリスムの動きが起こるのは当然であった。若きジッドは、このような思潮の流れの中で密かに呼吸をし、その本性の応えるところを模索していた。そして御風は、外国の思想を貪欲に吸収する日本において、彼もまた外来の思想を学びながら、本来の自己の姿を、絶えず捉えようとしていた。外国の自由詩を学んだ結果、御風が辿り着いた内在律とは、大正5年に、彼が生まれ育った故郷へ戻る導きとなったように考えられる。彼の『還元録』は多分に宗教

⁶ 鈴木信太郎「フランス文学黄金伝説」、『文学界』昭和31年6-7月、141頁等にもその様子は伝えられている。

的であり、トルストイやルナンなどに示されるキリスト教的文言と、日本土着の仏教的要素が混在している。ヨーロッパと日本をつなぐ要素は幾つもあり、一個に限定して、あるいは一本の道筋だけを辿って、この時代を理解することは出来まい。ジッドも御風も、彼らは大きな流れの中にあり、異なる土地で似た花を咲かせた奇遇種であり、彼らに共通しているのは、自らの本然を目指して、内在的な幸福を求めたところにある。

先に述べたように、ジッドの『地の糧』は、マルタン・デュ・ガールやジャック・コポーを通じて、人々に認識されるようになった。また日本においてもこの作品は、戦後の文学人に大きな影響を与えている。御風の場合は、自身が文壇から身を引いたこともあり、彼の「生」の思想の変遷が注目されることは少なかったが、逼塞した自然主義の限界から、次世代の新しい明るい文学への架け橋として、その果たした役割は、見直されてしかるべきであると考えられる。

このように、本論文ではアンドレ・ジッド、相馬御風2人の思想の経緯と、その類似性、「我」の思想とその結果に得た「生」の全体性という過程に焦点を当て論じる。文学史上においても、思想史上においても因果関係を持たないこの両者を結びつけるのは、個々人の思想であり、それを検討してきた結果言えることは、両者の思想の背景には「我」の思想、また「観照」を論じたドイツ観念論やショーペンハウアーの思想、そして時代背景としてアナーキズムの思想、象徴主義の精神が自ずと見えてくるといふこと、そして一個人の思想の過程が時代の架け橋となっているという点である。これこそ循環論法であるが、それが真実である。個人の思想を辿ることによって見えた、時代の力の大きな働きかけの力を、改めて認めざるを得ない。そして、考察を進めるに当たって後押しとなるのが、比較文学者イヴ・シュヴレルの「比較文学の領域は初めから与えられていたものではない。初めは仮説である。その仮説は、研究の結果においてしか、有効と認められることはないし、認められないことさえある。いかなる比較研究部門も、閉ざされた体系の拒否である」⁷という言葉である。この論考は、ジッドの側からだけでは当然成り立つはずもなく、また、日本におけるジッド受容の常識とされる枠からも浮かび上がってくるものではなかった。一個人の思想に静かに向き合ったときに、インスピレーションのように、自ずと理解される、異なる国の異なる思潮における類似性であり、それは「比較文学」という研究領域にこそ在り得る、視野の可能性であらうと考えられる。

⁷ Yves Chevrel, *La Littérature comparée*, P.U.F., série “ Que sais-je ? ”, (1989), 2006, p.124. 小林茂訳、イヴ・シュヴレル『比較文学入門』、白水社、クセジュ文庫、平成21年